

寢覚の女君論

「宿世」への内なる抵抗

西里美

序

平安後期物語の多くが源氏物語の影響の下、その踏襲、模倣を抜け出せないのに対して、『夜の寢覚』は、女主人公の心理に焦点を絞り、追求するという独自の領域を示している。女君が、苦悩に満ちた運命に鍛えられ、変貌成長を遂げる様が精緻に描かれていることは既に定説といっている。

反面、作者の視点は女主人公のみに集中しているため、脇役と主要人物の落差が大きいという欠点も持つ。脇役は必要に応じて物語を進める持ち駒に過ぎないのである。その中で、女君の身に降り懸る事件を共有する当事者達の扱いは別格であり、重要な役割が背負わせられている。

ここでは、歯車の狂った人生における女君の生き様を客観的に検証するための手立てとして、相手役である男君及び父太政大臣との関係に的を絞ってみた。女君にとっての彼らの果たした役割と影響、物語における位置づけについて

考察することにより、女君自身の人間像に、より密着することが可能になる。

娘として、女として、子の母として、女君は何を願う、求めたのだろうか。

(1) 父との関係

第一部での物語の舞台は太政大臣家内部に設定されている。閉鎖された家族社会の中での人間関係の複雑さは物語に陰影をつけ、父大臣の女君に注ぐ別格の愛情が強調される。

まず、予備知識として、冒頭に光源氏に酷似した父親の出自が語られる。父君の持つ高い社会的地位は、以後の物語の展開においてほとんど問題にされない。父君は深窓の姫君という女主人公の造型に必要な不可欠な社会的要素を付け加えた後は、一人の地位ある男性としてではなく、まさに父親としての一面のみ描かれるのである。

父君が物語展開に深く関与し、女君にとっても重要な存在意義を持つていることは、男君との契りに始まる秘密の懊悩が、父への告白によって表面上の解決をみるという、現存部分末尾の設定に確認することができる。しかし、同時に、父の容認が決して彼女の心を解放し得なかつたことにも注目する必要がある。何故、互いに対する深い愛情にも関わらず、父娘の真情は最終的に食い違ってしまったのか。結論から先に述べれば、現実の父親の姿と女君の描いた父親像との落差が次第に広がっていったためと考える。以下、論証していきたい。

突然の男君との「あやにくな契り」で初めて味わつた孤独の深さは、その後の女君の人間形成を方向づけた。それ以前は、家族の庇護の下、抛り所としていた父親と、秘密を持った瞬間から「別の世界に生きる^(註)」ことを余儀なくされる。更に、女君の悲劇に何の救いも与えることのできない父君は、心痛のあまり、広沢に出家隠棲することになる。女君にとって、秘密という障害を挟んだ心理的隔離に加えて、現実的空間的にも遠く手の届かない存在になった訳である。しかし、皮肉にも女君の身に添って何ら力となり得なかつた父君は、空間的隔離によって、女君の心に平安を与える別世界として根付くことになるのである。

女君の父君に対する心情は

「いかなることをおぼすらむ」とおぼすに恥づかしくわりなくて(225)

という表現に端的に見ることが出来る。父への思慕が深

ければ深い程、「恥づかし」の気持ちは常にブレイキとして働き、全身でぶつかっていけないからこそ、その存在は偶像と化していく。そのため、

「入道殿の御許なうてはよろづよりもいかで……」(392)

と、女君の救いは父に託されることになる。

「帝事件」「生霊事件」を経て、男君との愛情関係において、ぎりぎりまで追いつめられた女君は、一種の理想郷である広沢の父の世界に安らぎを求めようとする。苦難に満ちた現実からの逃避であり、精一杯の自己防衛とみる事ができるだろう。

一方、娘を迎え入れる父君は次のように描かれている。

「……待ち喜び、見たてまつり給ふにも、ただ今十五、六ほどの齢の御有様をのみ、若くうつくしげなること、いにしへよりも光添ひて」(437)

父親の目に映る娘が、幼い姿のままであることは象徴的である。そこには、女君の葛藤の本質を知らぬ、単純で盲目的な父親の姿がある。また、女君の運命に弄ばれる前―父を始めとする家族の愛に包まれていた頃の自分への懐古の心とも符合するのである。広沢は現世に絶望した女君が、心を解き放つことのできる唯一の場所であった。

ところが、「いささかの(隠し事)も許さぬ厳しさと無際限の愛情を併せ持った絶対的存在^(註)」であった筈の父君は、女君の出家を阻止せんとした男君の全ての告白によって、その実像を現した。父は二人を咎めず、自己の不明を恥じるのみなのである。あれ程願っていた父の容認は女君

にとつて、もはや何の意味も持たない。

「いかで見あわせ、御覧せらるべきにか」と悲しきまでものの恥ずかしきに：

と、彼女の父への感情は変化せず、寧ろ、より頑なになっている。長年の月日によって罪悪感が増幅され、現実の父が許していても、依然、絶対者として偶像化したイメージの父が彼女を許すことはないのである。ここに現実の父親像と女君の描いている理想の父親像との分離を確認することが出来る。

父君自身もまた、女君と男君との関係を踏まえて、次のような感慨を漏している。

「私はもともと皇族の出身であるためか、おっとりしたところがあり、世間の人のように厳格な性格ではないので、咎めようなどとは思わなかった」(494)

今まで問題にされなかった出自を根拠に語られているだけに、ここで読み取れる父親像はかなり現実の姿に近かったと考えられる。永井和子氏によると、父君は、

人間の根源にある正しき、良心、なつかしき、寛容、素直さなどをイメージとして引き受けている^(註)

という。女君はその中でも、殊に「正しき、良心」のイメージをデフォルメして受けとめていた。ところが、現実の父親は、寧ろ「寛容」で平凡な一人の人間に過ぎなかったことの裏付けになるだろう。

突然運命の波の中に投げ込まれて以来、女君は表面的にはなす術もなく流されているように見えつつ、実際は一步

もひかない。決して己の心を偽らず、妥協を許さぬ厳しさを持ち続けていた。女君が期待した道徳性、規範性は、実はそれを父親に仮託した女君自身の心の中に根強く存在していたのである。彼女を苦しめたのはいつでも彼女自身の心であり、唯一の抛り所もまた、父ではなく自身の心であった。

(2) 男君との世界

次に、女君の男君に対する愛情と苦悩に焦点を絞って見ていきたい。

第一部では、作者の苦心は専ら物語構成の面にのみ傾注されているため、女君の心理描写はほとんど見られず、宿命に翻弄されつつも受動的な態度を崩さない。この部分で物理的に運命を動かす力は男君に託されており、女君にとっては、その後の生き方を決定づけた煩悶の序曲として捉えることができる。

中間欠巻部を経た第三部では、作者の筆致は様変わりし、母となり、未亡人となった女君は目を見張る程、成熟し、自負心に満ちた女へと成長している。平穩な生活を送る女君に改めて「あやにくな宿世」を実感させる最初の事件が「帝闖入」である。

この危急に際し、咄嗟に女君の脳裏をよぎったのは、意外にも日頃遠避けてきた男君のことであった。

「あないみじ、内の大臣の開きおぼさむことよ(294)」

(男君に)『いささかの迷いこそありけれ』と聞こえむ恥かし(297)

「帝事件」は、女君の心にくすぶり続けていた恋の埋み火を読者に、そして女君自身にも知らしめた。女君の秩序を破る危機における意識だけに男君への愛情は説得力を持ち、印象深い。「常日頃の強がりも冷静さも単なる気休めにすぎなかったのか」(314)という独白に見られるように、男君との絶ち難い宿縁は否定できない。

しかし、これらは、愛情の露呈というよりも、彼女の内面にある潔癖性や一途さをよりよく抽出しているように思われる。おそらく、男君への愛情にも増して、女君独得の畏れと恥の意識に裏付けられた自己への執着心は強かったのではないだろうか。換言すれば、自分がこれまで築いてきた生活方式や理想をあくまで守りきろうとする姿勢である。

女君の思い描く人生とは「いみじう重りかに恥づかしく、人にすぐれてもただなる世」(346)を送ることである。彼女の恥の意識は、自己の人生に対する責任感の裏返しと言えるかもしれない。何よりも人の思惑が気に掛り、

「名を流すべきもただかの人の御ゆかりぞかし」(314)

と、男君を理想崩壊の起因として見なす。

帝事件は女君に彼女本来の気持ちを感じさせた。しかし、その意識は、男君を含む現実全てを受けとめようという外側へは向かわず、あくまで自己の内面に対峙する。平穏な生活への願いと男君への愛執の葛藤、矛盾は女君を動揺さ

せたが、彼女はそこから人生観を盾に抜け出そうとしている。

続いて、男君の正妻女一宮が物怪で苦しむ時、寢覚の上の生霊と名乗るものが現れ、女一宮を取り殺すと罵る事件が起る。男君は否定し、大方の説も「偽生霊」として解釈しているが、女君自身の反応はどうであったか。彼女もまた、生霊という醜態をさらすことなど「心のほかの心」(無意識中の無意識)にもありえないことと即座に否定している。

同時に、女君には、自分の心弱さにより男君を拒みきれなくなったことがこのような結果を招いたのだというはつきりした自覚がある。苦難の度に幾度なく宿世を嘆いてきた女君であるが、それまでは自己の矜持で乗り切ってきた。今回初めて、自分の存在自体が事件を引き起こし、周囲を巻き込んだのである。

その後、思いやりから事件に触れぬ男君との「心理劇」と呼ばれる無言の葛藤を経て、女君は更に追いつめられ、本音へと近づいていく。

彼女の心中思惟は、ついに

この人のほのめいたまふたびごとに乱るる心、今や今や
あくがれ寄らむこそ、我ながらゆゆしけれど、さばれ、
見え果つべきかは(423)

にまで至る。もし、自分の意識の外で、自分の知らぬ内心が乱れに乱れ、女一宮に取り憑いているとしたら…。女君はもはや生霊の噂を嘆いているというより、自分自身の中

に見出した「心のほかの心」に目も眩む思いなのだ。その存在の可能性に驚愕し、人の心の不確かさに戦っているのである。

生霊事件は、男君を独占したいという欲望や、女一宮への隠された嫉妬など、女君にはタブーであった人間の要素を表面化する結果をもたらした。これまで女君は、強い自負心を内に秘め、理性的な自己抑制によって暗い運命にもめげず、なだらかに人生を送ろうとしていた。しかし、この事件を契機に、改めて自分の処世の態度を振り返り、後世への絶望に苛まれることになる。

作者は心理の起伏を深く掘り下げ、登場人物―特に女君の深層心理にまで降りていくことに成功している。互いに對して強い愛情を感じている男君と女君を妨げるものは、外的な障害から、彼ら自身の心、殊に女君の内面世界へと変化しているのである。

生霊事件によって、我が身と現世に絶望した女君は、出家に「人生上の動揺世間の噂、後世への不安などを解決しうる」^(註)最後の可能性を託す。しかし、その悲願も父君の二人に対する容認や第三子懐妊という要素が絡み、断念せざるを得ない。女君は我が子が、疲れた心を慰めてくれる愛しいものであるのと同時に、物思いの種を増やし、つらい現世に我が身を結びとどめる存在でもあることをはつきりと思ひ知らされるのである。

また、物理的に障害のなくなった男君との新生活も「共に暮らすにはきつと見劣りのする人に違いない」(512)と予

測される。この言葉は長年にわたる男君との関係の中で下された一つの結論と言えるかもしれない。彼女は「子ゆへの愛」によって男君への愛執を意味づけ、過去を総括しようとしているのである。だが、子という存在そのものが、男君との宿世を具体化したものであるから、女君の「女」と「母」を完全に切り離すことはできない。「母」としての生は、決して彼女の救いにはなり得ないのである。

(3) 女君の内なる世界

これまで見てきた女君と父君及び男君との関係には共通点があるようだ。父君も男君も最初から平凡極まりない人間であるのだが、数々の事件を通して実態が明らかになるにつれ、女君は彼らを本質的に相容れない別世界の住人とみなすのである。

「何事も人にすぐれて、心にくく世にもいみじく有心に深きものに思はれてなにとなくをかしくてあらばや」

(455)

といふ彼女の理想の人生は、愛する父・男君・子供の全てから悉く妨害されたといえるだろう。絶大な信頼をおいていた父の理想性は崩れ、秩序を越えた男君への本能的な愛に苦しめられ、母性愛はこの世の絆となっていく。寄る辺ない女君には、独自の世界を深化するしか、他に道は残されていない。能動的に運命を変えていく力を持たぬ彼女は、宿命に抵抗するために内側の世界を深く深く掘り下

げ、自ら築いた固い殻の中に閉じ籠って行く。当然、妥協を許さず、理想から一歩も引かない厳しさと規範性によって、内と外は厳然と区別される。宿命は宿命として、「自分の生の意義は自分の力で価値づけてみせよう」(註5) という自負心が彼女の内なる世界を確立させたのである。

女君の自己の内面を守ろうとする防壁の姿勢は、畢竟、他者を寄せつけない排斥の態度を取らせる。だが、その研ぎ澄まされた内面に反して、外見から描かれる女君は、常に藪たけた柔らかい姿であった。これは、誇り高い自負心を内に秘めながら、自己を抑制し、摩擦を避けるようにして生きてきた努力の証なのである。

こういった女君の精神の強靱さを表す言葉として「心強し」が度々用いられる。

いとかう、そば顔なる御心強さは(254)さても、あさましう、心強かりつる人の心かな

男君や帝に対して、時には自分自身に対しても、必要があればぎっばりとした態度をとることができるのである。

反対に、父君の前での女君が、しばしば「心幼し」という態度を表している点にも注目したい。これまで終始一貫して精神の緊張を保ち、俗人の中で唯一人、胸を張って超然とした態度を崩すまいとしてきた「心強し」と矛盾するようだが、その自負心や自制心は、彼女が生身の女である以上、永久不滅なものではあり得ない。弱々しい姫君から成熟した女へ変貌する過程で強さを手に入れた女君は、案外、脆さや危うさも多分に残していたのではないだろうか。

その意味でいえば、父君は女君の内なる世界に一番近い存在だったと言えるかもしれない。

運命に妥協せず「我が身の有様」を凝視し続けた女君の思念は、過去から現在への「身の憂さ」を痛感するばかりか、やがて未来にさえ振り向けられていく。この世における自分の生は何だったのか、という懷疑は「自らの全存在あるいは全人生を『あるともおぼえず』と一気に否定しさるうとする激しい告発」(註6)と捉えられている。

後の世をだに、いかでと思ふを、さすがにすがすがしく思ひ立つべくもあらぬ絆がらになりまざるこそ、心憂けれど夜の寝覚絶ゆるよなくとぞ

という現存部分最後の一文に読み取れるように、女君の宿命の因縁はこの世にある限り、今後も決して緩和されることはない。女君はたった一人で、自分の内なる世界に対峙し続けねばならないのである。

結

義兄である男君との契りに始まった運命の渦の中、几帳目の影で泣いていた少女は、物語の進展につれて、自己の不徹底な生き方を嘆きつつも、心強く生きる術を見つけていった。

鈴木一雄氏は、この作品を

夜の寝覚の世界は狭い。しかし、人の「心」に焦点を絞る、心理の追求という一点であれ『源氏物語』の達成さ

れた高さを踏まえ、生かし、深化させようとする作者の努力は認めなければならない。

と評価されている。女君の心理的成長を夢中で描くことにより、作者自身も、知らず知らず、自己の内面の追求を余儀なくされていったに違いない。

運命に立ち向う女君の生き方は壮烈であるが、その感情が内に秘められているため、たおやかな姿で接する人々の目に映る。『無名草子』に「心上手」と賞賛される所以である。

一人の女が信念を守り続けながら生きていく姿は一種の理想像である。しかし、女君が傑出した人物ではなく、我々読者と同様に、時折立ち止まり、後を振り返らずにはいられない平凡な生身の女であることに気づいた時寢覚の世界はより身近なものとなる。

注

注1 湯橋 啓 「寢覚物語の女主人公の家族―父君と大君と―」(『国文』昭50・3)

注2 野口元大 『寢覚』の女君―「夜の寢覚の絶ゆるよなくとぞ」

注3 永井和子 「寢覚物語の老人」(『国語国文論集』昭61・3)

注4 野口元大 『夜の寢覚』の主題と構造 (『文学』昭42

注5 注2と同一

注6 横井 孝 『寢覚の世界』―「女」から「母」へ(平安文学研究 昭52・11)

注7 鈴木一雄 『夜の寢覚』(『日本古典文学全集』解説 ※ 引用は『日本古典文学全集』『夜の寢覚』(小学館)による。

第一部 現存本巻一、二

第二部 中間欠巻部分

第三部 現存本巻三、四、五

第四部 末尾欠巻部分

